



TITLE:

# 学業不振児の知的特徴に関する研究( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

村川, 紀子

---

CITATION:

村川, 紀子. 学業不振児の知的特徴に関する研究. 京都大学, 1967, 教育学博士

ISSUE DATE:

1967-07-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212299>

RIGHT:

【 8 】

氏 名	村 川 紀 子 むら かわ のり こ
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	論 教 博 第 4 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	学 業 不 振 児 の 知 的 特 徴 に 関 す る 研 究

論文調査委員 (主 査)  
教 授 倉 石 精 一 教 授 篠 原 陽 二 教 授 佐 藤 幸 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、学業不振児の知能構造の特異点を明らかにしようと試みたものである。

学業不振児に関する従来の研究の多くは、不振の原因を情緒不安定や環境条件に求め、性格検査、環境調査等によって、その分析を試みているが、本研究は、学業不振を問題解決の仕方、思考の能力等、知的側面から分析探究しようとした。

被験者として、米国テキサス州オースチンの小学校5・6年、中学1年の男女から64人の不振児を選び、各児にそれぞれ、性、年令、知能指数、居住地域、父兄の職業、経済条件が等しく、学業成就値が普通以上である対照児を組み合わせ、この64人を対照群として、比較検討した。

25種のテストが、一部は個人テスト、他は団体テストで4日間にわたり、各1時間ずつ施行された。

この資料にもとづいて考察されたことは、以下のごとくであった。

- (1) 一筆書きパズルや積木分類テスト等の問題解決において、不振児は仮説演繹的態度をとることが少なく、知覚にたよって、試行錯誤的な解決を行なう傾向がある。
- (2) 分類作業においては、抽象的基準によらず、具体的あるいは用途的基準にたよる傾向がある。
- (3) 客観的に一般化する能力に欠け、事象を主観的経験的な枠組でとらえる。
- (4) divergent thinking における spontaneous flexibility が普通児に比べて低い。これは概念の体系の分化と統合とが劣っているためと思われる。
- (5) 知能テストで測られている思考能力は、convergent thinking の面であることが多く、これに類する多くのテストでは普通児と不振児間の成績の差はみとめられない。
- (6) 推理の型については、不振児には不十分な情報で誤った推論を行なう傾向がみられる。
- (7) 不振児は機械的記憶においては遜色がないが、文章記憶では、記憶の仕方が粗雑で不正確である。
- (8) 知能プロフィールにおいて、言語性知能が高い児童は、普通児では75%であるのに対して、不振児では35%に過ぎなかった。

要するに、学業不振児は抽象的思考において劣り概念を具体的個人的経験的に体系づけ、自分を中心とした主観的な見方をとりやすい。一方彼等は空間知覚の能力で、普通児に劣らないが、この能力を用いてむずかしい推理問題を解こうとする傾向がある。I. Q. が普通児に等しくても、以上のような知的特徴が、学業不振の原因をなすと考えられる。

この理解にたつての学習指導が要望される。

以上の所論のわが国児童への適用性は、不じゅうぶんながら若干の追試によって検討した。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、学業不振児に関する従来の教育心理学的研究が、不振の原因を児童生徒の情緒不安や環境条件への心理的不適応に求めて、当該児童の知能構造の詮索には重きをおかなかった点に着目し、学業不振児の知的機能の特徴を、明らかにしようとしたものである。

実験対象および対照群の設定に、工夫の跡がみられるとともに、使用したテストは25種目におよび、同一被験者を分析精査した点で、従来の諸研究をしのいでいる。

資料の分析には、多角的な指標を採用して、考察を深め、先人の見出した知見を、新しい実験結果によって裏付けるとともに、若干の新知見を提供している。

ことに25種目のテストバッテリーの因子分析の結果を省察し、テスト問題の因子負荷量は、被験者を通じて必ずしも同一ではなく、問題への接近の仕方によって、当該テストで測定される能力が異なるという見解を、データにもとづいて提言しているのは、とかく安易にながれがちな、筆紙法テストに警告をあたえるという意義がある。

学業不振の原因は多様であり、不振児を指導する上の着眼点も多面にわたるが、従来強調されなかった学業不振児の知的特徴を心理学的に解明した点は、学習指導上にも重要な示唆をもつものといえる。

要するに、本論文は教育心理学的研究として、理論および実際の両面に貢献したと認められる。

よって本論文は、教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。